

研究論文 (Articles)

# 異なる通学路環境に対する質的評価の違いについて<sup>1)</sup>

—特定の児童グループによる道の使い分けと発言に注目して—

水 月 昭 道

(立命館大学衣笠総合研究機構)

## The Comparison with Children's Evaluations of a Temporary School Route and a Refurbished Route.

MIZUKI Shodo

(Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University)

This study compares children's evaluations of a temporary school route and a refurbished route. I walked along school routes, following and with the school children, in order to identify the differences in their behavior between walking along a temporary school route during the refurbishment period and along the refurbished route. The group of children preferred the school route, which had a variety of environmental experiences, compared to the route that had poor environmental experiences. The children did not give tangible reasons for their preference of school routes but had clear emotional responses. This study points out the importance of constituting physical and social environmental design for children's emotional well-being. Even if a road is refurbished to improve road safety, the safety for children is not accomplished without taking into account children's own assessment of the road.

**Key words** : child, street, children's play, affordance, evaluation

キーワード : 子ども, 通学路, アフォーダンス, 道草遊び, 環境評価

### 1 研究の背景および目的

子どもの外遊びが見られないということが問題となって久しい。この問題の直接的背景としては、1955年以降から始まる急激な都市化による子どもたちの遊び環境の劣悪化ということが指摘されている(仙田ら, 1981; 水月・南,

2002)。地域環境の変化により子どもたちの遊び場が消滅していくということに対して、1974年には、社会教育学者の藤本から次のような発言がなされた。「このような都市化による地域環境の大きな変貌は、子どもたちの遊び空間の変化に決定的な変化を与え、子どもたちの遊びを変化させる要因となっている。子どもの遊び空間について、社会学的、行動科学的に検討を行うことが急務である」。以来30年経つが、子どもの遊びを取り巻く環境は決して満足出来るものとはならない。

1) 本研究は、日本学術振興会・人文社会科学振興プロジェクト「ボトムアップ人間関係論の構築」より援助を受けています。

この領域を対象とする研究としては、公園の整備や配置計画、遊び場の形態的特徴の分析、遊び空間の性格把握、遊びとそれに対応する環境の関係性把握、子どもの環境認知についての把握、遊び仲間や時間、空間などについての実態把握、外国都市との遊び環境比較などが現在までに行われており（水月・南，2002）、研究テーマの全体的動向は大きく次のような変遷を示している。

最初期の研究課題は、都市化における遊び環境の劣悪化を空間的に解決しようとする、子どもに対する物理的な遊び場の提供を目的とするものであった。70～80年代にかけて、児童公園などに代表される空間的な環境整備が行われた後、新たな課題が浮上した。それは、子どもは、公園などの遊びを目的として整備された場所だけでなく、地域のさまざまな場所を利用して遊んでいるという、彼らの遊びの実態の一側面が明らかになったことと関係していた。ここから、公園などの拠点的な遊び場の整備という方向から、地域全体における面的な遊び環境整備へと、遊び環境をめぐる視点に移されていき、子どもの遊びを保障する地域空間計画などの視点に立った研究が行われ始め、これが2つめの流れに繋がっている（水月・南，2002）。

80年代後半に入ると、寺本らによる、子どもの環境認知のあり方についての研究や、南らによる、子どもの視点からの地域環境再評価といった、これまでの都市化を背景とした直接の問題から離れた研究が行われ始め、子どもの遊び環境をめぐる研究的視点が広がっていった。近年では栗原らによる場所の意図性を捉えようとする研究も始められており、この領域における研究テーマが、物理的な遊び場のみを扱うだけでなく、遊び場に対する本質的な理解を試みるものへと深まっていることが理解できる。このようなことから、子どもの遊び環境に対する本質的な理解という現代的課題に対して、人間と

環境の相互の関わりに注目した環境心理学的視点に立った遊び場の構造の解明などに関する研究の必要性が高まってきていることが窺えよう。

以上のことから、本研究では、異なる環境を有する通学路における子どもたちの視点から導かれる質的評価の違いについて、特定の児童グループによる道の使い分けと発言を取り上げることで、その差についての考察を行うことを目的とする。

本研究が対象とする通学路については、発達の観点から見た場合、対象となる空間は、占有度のもっとも高い家などの一時的な領域と学校などの公的な領域との間にある二次的な領域と位置づけられ（Werner & Altman, 1998）、子どもにとってのこの時空間が遊びを可能とするだけでなく、家以外にも自分が安心できる拠点としても重要な場となっていることが指摘されている（水月・南，2002）。つまり、通学路は子どもの発達にとっても重要な場であることが理解され、この場所において、子どもの遊び行為の理解のための観察や調査を行うことは意義あるものだと考えられる。

## 2 調査の方法と調査対象地の概要

### 2-1 調査の概要

福岡市に隣接する春日市のO小学校区において、小学校4年生と5年生の2つのグループの下校に参加し、そこで展開される行動場面と場所との関わり方の記述を行うと同時に、写真、インタビューによる記録を行った。

O小学校では、通学路が指定されているが、2001年12月より2002年3月まで、通学路改修工事のため指定通学路が一部変更されている。そのため本研究においては、これらの道環境の違いと子どもの道草遊びの間にある関連を見いだすため、全体を次の3期に分けて調査を行って

いる。

第1期目は改修前の現行通学路において、第2期目は改修工事期間中の臨時通学路において、また、第3期目は改修後の現行通学路において観察を行った。

下校時間は、現行通学路においては概ね25～35分、臨時通学路においては30～40分程度かけている。グループのメンバーは、4年生については3～7名の間で女子2名を含む推移があり、5年生については4名の男子メンバーで固定されていた。

調査対象となった通学路については、次のような環境であった。現行通学路は、改修前および後ともに、自動車が2台すれ違ふことがぎりぎり可能な程度の道幅であり、通り沿いに商店が数店舗と地域公園が1つある。車の往来は激しく、たびたび歩道の白線内に侵入される。道の形態は直線的で、隣接する自然空間などは少ない。人通りは多く、子どもが地域の人の目に触れる機会が多い。なお、改修後は車道の片側に幅1～1.5mの歩道が歩車分離のブロックと共に設置されている。

臨時通学路は、住宅地内の生活道路であり道幅は概ね車一台が通れるくらいであり、このような環境のため自動車の往来は少ない。隣接する自然空間などが多く、道は曲がりくねって変化に富んでおり、抜け道なども多い。商店ではなく、子どもが人の目に触れる機会が少ない。

調査期間は第1期2001年11月～12月、第2期2001年12月～2002年3月、第3期2002年5月～2003年3月まで。

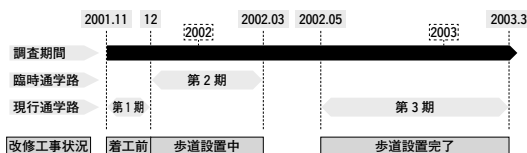


図1 調査期間と対象通学路

## 2-2 調査方法—子ども集団への参加の過程

本フィールドにおいて、子どもとの最初の接触は次のような経緯で行われた。本フィールドでは通学路の変更に伴い、当初は集団登下校の形態が選択されることとなった。特に登校時は、一部児童の父兄の輪番による安全確保といったことが、約2週間にわたり実施されたこともあり、私は父兄に交じりながらこの登下校に毎日付き添うという形で参加を行った。登下校の過程で、私が道の環境調査や子どもの行為の観察のためにカメラやVTRを使用していると、何人かの子どもたちが声をかけてくるということがあった。子どもたちは、私のカメラやVTRなどの機材に興味を持ったらしく、貸してほしいやら撮影して欲しいやらといったことをねだってくるが多々あった。そのため、私は、携行している撮影機材を子どもとの関係を構築する媒介物として意識して使い、次第に子どもたちとの仲を深めていった。

毎日の登下校を一緒に繰り返すなかで、十分に親しくなったのち、こちらの調査内容や調査意図を説明すると、私に最初に接触してきた子どもが中心となって、「おっちゃん調査するらしいけん協力してやろうぜ」といって、周囲の子どもたちに声をかけてくれることとなった。こうした経緯から、子どもたちが調査に協力してくれるということになり、私は彼らの登下校の仲間となり参加できることとなった。

調査の頻度については、次の通りである。第1期では、子どもたちが通学の過程でどのような活動を示しているのかといったことに留意した行動観察が3度実施された。この期間における調査は、2期目以降の調査に繋げる事前調査の意味合いで実施された。第2期では、冬休みに入る約20日ほどの間、毎日の参与観察が行なわれた。この期間に、子どもと調査者の間に信頼関係が構築されたと考えられたことから、冬休み以降は、天気の良い日を選択しながらの調

査となり、学年ごとに週に2～3度の頻度で実施された。3期目には、季節の変化などを意図しながらの調査を実施したかったために、5, 6, 7月および9月において、各学年にわけて概ね4度ずつ程度の頻度で調査を実施した。秋以降は、補足調査等の実施が数度行なわれている。

### 2-3 留意点—子ども集団と調査者の関係

本調査では、子どもたちの下校に子どもたちの仲間としての立場で参加するということに留意していた。そのため、私は、観察者という立場よりも子どもたちと行動を共にするメンバーの1人というような位置に自らを置いていた。子どもたちと同じように下校を行い、子どもたちと同じような行動をそこで行うこと、また、子どもたちとの多くの会話を通して、下校における体験を共有しながら道の環境との関わりの実践を行うことに主眼を置いていた。

子ども集団のなかへの同列的な参加を行う試みは次の理由によっている。従来、子どもの素の姿については、少ない時間で迫ることは難しいと考えられており、子ども世界の実態に迫ろうとする際には、彼らのグループのなかにメンバーの一員として入り込み多くの時間を費やすなかでその実態を把握していくことが必要となってくるからである。

10～12歳くらいの子どものたちは、大人目から離れて彼らの独自の世界を築くようになる。この年代の子どものたちに、調査者として接する場合には、同列的な関わりの上に子どもたちとの間に信頼性を築くことが大事なのである(Fine & Sandstrom, 1988)。

このようなことから本調査では、子どもたちの登下校の世界を、子どもたちの領域に調査者自らを位置することから捉えようとした。子どもたちと私との関わり方は、「観察者」と「インフォーマント」という関係ではなく、下校へ

参加する“おじさん”と“子どもたちグループ”というような形に落ち着いている。私は、子どもたちと全くの同列関係ではないが、子どもたちの下校過程に参加する人であり、子どもたちにとっては下校の仲間という形の位置に居ることが出来るように留意した。

ただし、私は大人であり、その意味では子どもたちと完全な仲間になることは出来ない。例えば、下校の過程で崖などの自然環境に遊ぶ子どもたちに対し地域の人から注意が行われるといったような、子どもと地域の人との間に不都合が発生した場合にはその介入者になるし、あるいは、子どもたちへ注意をする立場になることもあった。また、私がいることで、校則などにより普段は自制している子どもたちの道草遊びに対する欲求が解放され、遊びが行われるということもあった。下校過程の初期においては、私に対し、子どもたちがわざわざ遊びを見せてくれるという意識的な行為も行われた。

こうしたことからわかるように、私の調査者としての立場からの子どもたちとの関わり方は、基本的には参加者という立場をとりながら、場合によっては子どもの行為に介入したり、子どもの行為を誘発したり、子どもと大人との相互作用への中間的介入が行われたりといったような揺れ動きがあった。

### 2-4 データの記述と分析

データ収集の方法は、私が調査者として、小学校4年生と5年生の2つのグループの登下校に参加することで、そこで展開される子どもの行為と場所との関わり方に対する記述を中心としながらも、その通学路に特有の遊びなどがある場合には遊び場面のプロットを行うと同時に写真による記録も行った。登下校の過程では、子どもたちに対してさまざまな質問を行っている。そうした会話や下校の場面全体に対する記録として、登下校の直後においてフィールドノ

ーツをつけることで登下校の様子を記述した。

記録のとり方としては、登下校の過程で起こるさまざまな出来事について、道の環境との関わり方や会話の様子、子どもたち同士の遊び、私と子どもたちの間に起こる出来事などに注目しながら、それらの場面をその日の下校の時間を追いながらの記述を行っている。つまり、フィールドノーツに記述された内容は、登下校の過程で起こったさまざまな出来事が単に混じり合う形で全くの無作為に行われたのではなく、子どもと道の環境との関わり方や、子どもの会話や子どもと調査者の会話の様子、子どもたち同士の遊び、調査者と子どもたちの間に起こる出来事などに対して注目されながら、下校の時間的推移に添っての記述が行われた。

本調査についての分析は、基本的にこのフィールドノーツに記述された内容を対象としたものである。分析にあたっては、本研究の目的である、通学路環境の質的評価の差異などを明らかにすることを念頭に置きながら、フィールドノーツ全体の記述から子どもの発言や行動などについて、ターゲットとし得る評価にかかわる内容的にまとまった部分を固まりとして取りあげ、その内容についての整理を行うという手法をとっている。

これは、いわゆるリサーチ・クエスチョンを最初に設定して、そのクエスチョンを検証する形でデータを取り上げるという形式ではなく、登下校という時空間のなかで行われた出来事を概観するなかで、調査者の問題意識に触れる出来事の記述が見受けられた場合に、そのデータに注目してみるという手法を用いたものであった。具体的な手順としては、フィールドノーツに記述されていることがら全体に対し、子どもと道の環境の関わり方が捉えられているものや、子どもの発言、子どもと調査者の間に行われた会話や交流の様子などに関する記述があるときに特に注目しそれらの整理・分析を行っ

ている。

この手法は、データのなかから重要であると思われるものを浮かび上がらせようとする試みであり、通学路での子どもを対象としたフィールドワークにおけるデータ記述とその分析場面においての、当該事例における実験的な理論的サンプリングの試みであった。質的研究においては、対象となるフィールドが多岐にわたっているため、個々のフィールドで実施されたフィールドワークおよびその分析は、全く同じ手続きによって実施されるとは限らない。

本研究で実施されたフィールドワークでのデータの取り扱いについても、これまで質的研究の分野において展開されてきたデータ収集や分析についての議論（無藤・やまだ・南・麻生・サトウ、2004）などが基にはいるのであるが、あくまでも個別のフィールドにおいて実施されたそのフィールドに固有の質的研究という立場にあることを確認しておきたい。ただし、そうした固有のフィールドにおける理論的サンプリングを基に行われた研究であっても、通学路というフィールドの広範囲において一般的に通用し得る仮説の生成までは視野に入れられている。

### 3 調査の結果と分析

#### 3-1 道草遊びに見られる2つの形態

通学路における遊びの傾向を把握するため、調査期間全体において観察された道草遊びの形態を表1に示す。

ここから、通学路での道草遊びは「子どもたちの間」で行われるものと、「環境との関係性」のなかで行われるものの2つの形態があることがみてとれる。

子どもたちの間でみられる道草遊びは、「おいかけっこ」や「足のひっかけあい」などの、「ふざけあい」や「じゃれあい」の延長線上に

あるようなものが多く観察されており、また、環境との関係性のなかでの道草遊びとしては、歩車分離のブロックの上を歩いてみたり、道沿いの草花にさわってみたり、あるいは道沿いにある小さな崖などを登ってみたりといった、歩行中に彼らの目の前に出現する環境との相互交流（transaction）を通して成立している道草遊びが多く観察された。

そのため、道を歩いているときに子どもたちの間にじゃれあいなどの遊び行為が成立するかどうかといったことや、子どもたちと道環境の間に相互交流が成立するかどうかといったことが、道草遊びの発生と展開に繋がる重要な要件となっていることが窺える。

以下では、これらの遊び行為や相互交流の成立と道との関連を把握するため、本調査における3つの期間を通じて異なる通学路環境下におかれた子どもたちが、それぞれの道を歩く時にどのような道草遊びを行ったのかについて、道の環境との対応の差から整理を試みる。

表1 道草遊びの形態

子どもたちの間にみられる道草遊び	環境との関係性のなかでの道草遊び
傘を使ってちゃんばらごっこ	石蹴りをしながら歩く
鞆の引っ張りあい	歩車分離のブロックの上を歩く
足のひっかけあい	草花などに触る
言葉遊びゲーム（赤・赤・青など）	落ちているものを拾って遊ぶ（小枝）
追いかっこ（後ろからきたグループのGr.を追い越すと、追い越しあいが始まる）	犬の糞を見つけて騒ぐ（糞を踏んだ子どもはウンコマン呼ばわりされ、鬼ごっこがはじまる）
かくれんぼ	秘密の抜け道を通り抜ける
ジャンケンと罰ゲーム	小さな崖などにのぼる
会話をしながら帰る	動物との接触
ランドセルの鍵を触って悪戯	飛行機に向かっておまじないをする

### 3-2 異なった道環境での遊び方の差

道の環境と子どもたちの道草遊びの関連性についての傾向を把握するため、遊びの形態および本調査の3期間における道の全体的環境の違いを整理し表2に示す。

まず、現行通学路における改修前後の環境の差についてであるが、改修前には歩道が無く子どもたちのすぐ側を車がかすめるという環境で

あったが、改修後は幅1～1.5mの歩道が歩車分離のブロックと共に設置され、通過交通による危険性は減少しているという点での違いがある。また、改修に関わらずこの道全体の環境としては、通過交通が多い・直線的な道である・隣接する自然などが少ないといった特徴が挙げられる。

このような状況のなか、改修前後における道草遊びの形態の差については特に子どもたちの間における道草遊びのあり方として次のような差が認められた。

改修前の通学路においては、子どもたち同士の間に見られた遊びとして、道幅が広がっている場所や駐車場などが隣接して広がっている場所などがある場合、道に広がったり駐車場のなかで広がったりしながらの「じゃれあい」や「ふざけあい」といった遊びが観察されたが、道路改修において歩道が設置されとこれらの遊びは行われなくなった。また、子どもたちへのインタビューからも「狭くて遊べない」といった声があがっていることから、歩道の設置に伴ってこの道での子どもの遊び活動が抑制されていることが窺える。

次に、臨時通学路の道環境の特徴であるが、狭い・変化が多い・自然が多い・通過交通が少ないなどといったことが認められており、このような環境下において子どもたちは、友達同士の間において道幅いっぱいになりながら、じゃれあう・鬼ごっこをする・ゲームをするなどの遊びを行っており、道の環境との間においては、隣接する崖などに登ってみたり、脇道などを秘密の抜け道としてみたりあるいは、上空を飛ぶ飛行機を見つけておまじないをしたりといった環境との相互交流が認められた。

3つの道環境下での遊び方の差に注目すると、現行通学路における道草遊びは、改修前後に関わらず、臨時通学路において観察されたような子ども同士での多様な遊びがあまり行われ

ていないことがわかる。この要因の1つとしては、彼らが遊ぶために道いっばいに広がってこうとすると車がやって来るために、その活動の輪がしぼんでいくといったことが関係していることが窺えるが、その他の要因として、道のつくりや付随する自然などの環境が影響していることも考えられる。

そのため、次では最も多様な遊びが観察された臨時通学路において、子どもたちの遊びがどのようにして発生し展開しているのかという遊びの構造に注目することで、道を歩く時の環境のどのようなことが道草遊びと関係しているのかについての把握を行う。

表2 道環境の変遷および子どもたちの行為

	子どもたちの間	環境との関係性
現行通学路（改修前） 直線的な道・自然が少ない・通過交通が多い（広い場所では遊ぶ）	（道幅が広くなったり、駐車場などの隣接空間がある場合）じゃれあいなどが見られる	・石蹴りなど ・店の軒下で雨宿り ・草花などに触る ・塀をつたい歩かす
臨時通学路 狭い・変化が多い・自然が多い・通過交通少ない（よく遊んでいる）	（道幅いっばいに広がって）走る・じゃれあう・ふざけあう・鬼ごっこをする・ゲームをするなどの行為が見られる	・崖などを隠れ場とする ・脇道などを秘密の抜け道とする ・飛行機をみつけておまじない
現行通学路（改修後） 幅1～15mの歩道が歩車分離のブロックと共に設置された（子どもたちの活動の阻害）	（歩道が狭いため）じゃれあいなどをとするスペースがなく、子どもたち同士での遊びはほとんど見られない	・歩車分離のブロックの上を歩く ・側溝の蓋の上をスキップする

### 3-3 道草遊びの発生と展開

道草遊びの発生の傾向をみるために、遊び発生時における環境と子どもの行動の対応関係を表3に示す。

これによれば、子どもは、信号待ちなどで立ち止まった時にふざけあったり、曲がり角を曲がった瞬間に走り出したり、落ちていた小枝を

表3 遊び発生時の様子と子どもの行為

遊び発生時の環境の様子	子どもの道草遊び
雪などのいつもと違う天気	雪合戦などをして遊ぶ
曲がり角や坂道へさしかかる場所など	隠れたり、突然走りだしたりする
信号に近づくと時や信号待ち	ふざけあったり、走ったりする
小枝や犬の糞などが落ちていた場合	拾って遊んだり、鬼ごっこをして遊ぶ
知り合いに遭遇	話しかける
猫などに遭遇	呼びかけたりする
飛行機を発見	おまじないをする

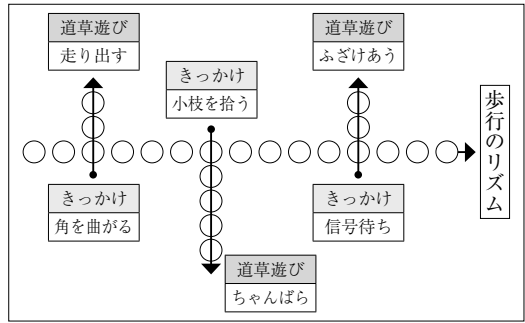


図2 歩行のリズムと遊び発生の様子

偶然拾うことからチャンバラをはじめたりというように、子どもの行動が「動」から「静」に変わる時や、道が変化したその時や、目の前の環境に変化が起こる時などの、子どもたちの歩行のリズムに変調が起こる「時」を「きっかけ」として遊びが発生していることがわかる。（図2）

ここで、「きっかけ」となる具体的環境の性質を把握するために、その環境を便宜的に分類したものを図3に示す。歩行のリズムが変わる「きっかけ」には、「天候」や「道のつくり」や「他者」などが関係していることが窺えるが、道に備わる性質としては大きく次の3つに分類を行った。まず、道を歩く過程において出会う曲がり角や信号などの道の形態にかかわるものを「変移性」として分類した。つぎに、雪などが降ることでいつもとは違う街の様相を表すものを「非日常性」として、また、知り合いなどが目の前にフッと現れた場合などについては「偶然性」などとして捉えている。

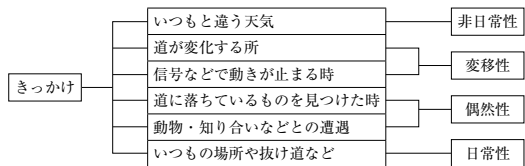


図3 遊び発生のきっかけとその性質

図4は、2本の通学路を対象としながら、こ

これらの性質から具体的な環境の差に注目したものである。2つの通学路においては、明らかに子どもの道草遊びの展開のされ方が違っており、道の形態やそれに備わる性質などと、子どもの道草遊びの間には密接な関係があることが理解できる。

ある日の臨時通学路における道草遊びは次のような展開であった。現行通学路から臨時通学路へとコースが変わる分岐点を曲がったところから、子どもたち同士におけるじゃんけんゲームなどの道草遊びが始まった。少し歩いたところで、今度は小さな崖に登ってひとしきり遊び、それが終わるとまた歩き出し、その途中で上空に飛行機などを見つけるとおまじないを始めたといったような形で、遊びが次々と連続して展開される様子が多く観察された。

それは、曲がり角にさしかかったところで道いっぱいに広がりながらゲームが始められ、崖が見えるとそこに登り、ふと空のほうから音が聞こえると飛行機に向かっておまじないをするといった遊びが始まることからわかるように、この通学路に備わる多様な自然環境と道の安全性、多くの曲がり角といった道の変化などが、子どもの遊びの発生と展開とに深く関わっていることがみてとれる。

一方、観察期間を通して、現行通学路においては、子ども同士での遊びの発生が非常に少ないことが特徴的である。子どもの道草遊びは、道に付随する環境と接触することで行われる、ブロックの上を歩いたり、草花に触ったりといったものが多く、道を歩きながら遊びが展開していているというよりは、歩いている途中にたまたま目の前に出現した環境に対して反応する形での単発的な道草遊びが、下校の経路途中で散発的に発生していた。

このような観察から、子どもの道草遊びは、特に、安全性などが確保された上で、自然環境などの、子どもが遊びの道具や空間として利用

できる環境が多く道に備わっており、その上でさらに、その道でのさまざまな環境体験を可能とする質的な特徴などが認められる場合には、それがきっかけとなって子どもの遊びが展開されていく様子が理解できよう。

ここまで、子どもの道草遊びの発生の様子と展開のされ方、および道の環境との関係性について捉えてきたが、それでは、子どもたちがこのように道を歩きながら道草遊びを行うとき、彼らが歩く道に対してどのような点を評価しているのだろうか。次にその分析を行う。



図4 2本の通学路における遊びの差

### 3-4 道環境への印象と遊びの差

子どもたちの通学路に対する印象と道草遊びの展開のされ方に見られる関係性の傾向をみるため、表4に子どもの通学路に対する印象をまとめる。臨時通学路においては、「帰り道の柿をとってみたい」といったような道に隣接する自然環境などに対して興味を示す発言や、「シーサーがある家を見つけた」というような道沿いにある住宅などのなかに対するなにかの発見、あるいは「車がこないのでマンホールを踏



んだりしてゲームができる」といった、道に付随する環境を使いこなす様子や、「坂のかんじがいいよ」などの道自体のイメージを表すものなどが多く示された。

一方、現行通学路においては、「車が怖い」「車がたくさんくるので安心できない」などといった、通過交通に関する警戒を表すものが中心であり道の環境を語る言葉が少ないことが特徴的である。また、「道が広く動きやすいけど車が怖い」という発言もあり、このような発言からは、たとえ子どもたちが友達とじゃれあったりといったことをしたくとも側を通過していく車が気になって遊びに集中できず、常に緊張感を強いられている彼らの様子が窺えよう。

表4 2つの通学路の印象

道	子どもたちの通学路に対する印象	
	ポジティブ(楽しい・良いと思うこと)	ネガティブ(良くない・嫌だと思うこと)
臨時通学路	<ul style="list-style-type: none"> <li>・帰り道は坂がずっと続くので楽しい</li> <li>・狭い感じがいい</li> <li>・聞われているみたい</li> <li>・安心して石礮りが出来る</li> <li>・車がこないでマンホールをゲームの道具にして遊べる</li> <li>・坂を上がったり下がったりするのが楽しい</li> <li>・家の前のブロックにのったりするのはおもしろい</li> <li>・シーサーがある家を見つけた。おもしろい</li> <li>・帰り道の柿をとってみたい</li> <li>・座の上に秘密基地をつくりたい</li> <li>・ゴミが落ちてなくて綺麗</li> <li>・マンホールを踏みながら歩くのがおもしろい</li> <li>・学校に行くのが楽しくなる道</li> <li>・抜け道があっていい</li> <li>・家からご飯のうまそう匂いがする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校まで遠い</li> <li>・道にのぼってみたいけど見つかったら怒られそうなのでいいかない</li> </ul>
現行通学路	<ul style="list-style-type: none"> <li>・石礮りをしながら歩くのが楽しい</li> <li>・学校まで近いので好き(臨時通学路より)</li> <li>・段差などが多いのでのったりおりたりが沢山できる</li> <li>・知り合いと会うことがある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公園で春日小のやつらにガンをつけられる</li> <li>・寄り道をするところが少ない</li> <li>・車がこわい</li> <li>・車が多い</li> <li>・車が多いので安心して歩けない</li> <li>・道が広くて動きやすいけど車がきてこわい</li> </ul>

2つの異なる環境の道における彼らの発言の差から、道草遊びが展開されるには、道自体が「通過交通が少ないこと」などといった、ある条件下におかれていることの必要性がわかる。

そしてそれは、単に、道に「自然環境」や「脇道」といった隣接する環境・空間、および「歩車分離のブロック」などの遊びのアフォーダンスを有するさまざまな形態の環境要素が付随しているだけでは、子どもの道草遊びが展開に至るまでの道環境として考えるときには不十分であり、それらの道草遊びを誘発させる潜在性を備える環境とともに、道自体に「安全性」など

といったものが基本的な条件として備わっていることが遊びの展開に至るための重要な要件となっていることが理解できよう。

### 3-5 2つの通学路に関する全体的感想

子どもにより語られた2つの道の体験後における全体的な感想から、子どもが2つの道のそれぞれに対して抱いているイメージについて取りあげたい。感想として語られた言葉による環境についての把握のみならず、子どもたちが言葉によって語ることの出来なかった部分についての把握を試みたいからである。

表5は、2つの通学路を体験した後の子どもたちによる全体的な感想についてまとめたものである。このなかでも、臨時通学路に関しては、「遠回りになってもまたこの道を歩きたい」といった意見や、「何が良かったのかを説明するのは難しいがよかった」といった肯定的なものが多かったが、現行通学路に関しては、「ただ家に向かって歩くだけ」といったものや、「なんか楽しいというの(感覚)がない」といった否定的な感想が述べられている。特に、現行通学路に関しては、「真っ直ぐ帰るだけ」「ただ、歩くだけ」という表現が用いられていることが興味深い。実際に地図上で確認すると、この道がほぼ直線的な道路であることは明らかであり、そのため、前述したような「道の形態」といったことに関しても変化が少ないといった特徴が挙げられる。臨時通学路と比較して、この道が、子どもたちにとって、変化の乏しい直線的な道であるというように捉えられていることが窺え、また、評価も相対的に低くなっていることがわかる。

子どもたちの発言からは、理由を語ることは難しいが「なんか楽しい」というものが、道を歩く際に確かに感じられていることがわかる。そしてそれは、臨時通学路には存在しているが、現行通学路には存在してはいないことは明らか

である。そして、「ただ真っ直ぐ歩くだけ」という発言からは、現行通学路において、子どもたちによって自覚された遊びの展開は極めて少ないということを示しているものと思われる。こうした環境の通学路では、子どもたちと道との動的な関わり方においても、「自然環境」や「道の形態（坂道など）」といったものが備わる臨時通学路に比較して、その関わり方が受動的なものとなりがちになるであろう。崖や脇道を見つけて、そこに登ったり通り抜けたりといった道草遊びが道との能動的な関わり方であるとすれば、受動的な関わり方としては、道を歩く途中に目の前に出現した歩車分離のブロックなどの上に飛び乗ったりといったものが挙げられるだろう。道に備わる環境の違いにより、道との動的な関わり方も変化することはここからも明らかである。

表5 2つの通学路を体験した後の感想

2つの通学路を体験した後の全体的な感想	
臨時通学路に関して	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遠回りになってもまた臨時通学路を歩きたい</li> <li>・（なにが良かったかを）口で説明するのは難しいけど前の道（臨時通学路）はよかった</li> <li>・前の道（臨時通学路）を通して帰りたいと思うことがよくあるけど、校則で今の道が指定されているのでそれはしない</li> </ul>
現行通学路に関して	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今の道（現行通学路）は、ただ家に向かって歩くだけだからおもしろくない</li> <li>・真っ直ぐ帰るだけの今の道は、話とぎれると辛い</li> <li>・「なんか楽しい」というのが、今の道にはない</li> <li>・今の道（現行通学路）のほうが家まで近いけど、抜け道となくて、ただ歩いとうだけやけんつまらん</li> </ul>



写真0 歩道の設置工事

### 3-6 改修後の現行通学路に出現した新たな問題

現行通学路には、自動車から子どもを守るために歩道が設置されたのであるが（写真0）、本調査から、この設置工事が行われたために、子どもたちに新たな危険が生じている様子が捉えられた。

それは、歩道が設置されたために、子どもたちの行動に一定の制限が設けられることによるものであった。写真1および写真2は、設置された歩道が、実際には子どもたちにどのように利用されているかということを示した例である。

写真1は、女の子2人があるいている後ろ姿であるが、1人が歩道のなかを歩き、もう1人は歩道の外を歩いている。この理由は、歩道の幅が非常に狭いということにある。女の子たちへのインタビューからは、「（歩道が）ないときには並んで歩きながら話しをして帰ることががしやすかったけど、歩道が出来てからはしにくくなった」という意見がきかれた。女の子たちは、友達とお話しながら下校路を歩くことに楽しみを見いだしていることを語っていた。そこに、狭い歩道設置による物理的な制約が発生すると、彼女たちは自分たちが並んで話しをするという行動が行いやすいように、歩道をまたぐ形での利用を行うようになった。歩道の外



写真1 歩道が狭いためはみ出して歩いている

側は、自動車の通行が多く、こうした子どもの行動の傾向や気持ちを把握しないままに設置された安全対策の歩道によって、子どもたちにとっては新たな危険が生み出されてしまっていることが指摘される。

写真2は、男の子がふざけあっている姿であるが、これも歩道からはみ出したものである。彼らは、狭い歩道のなかをただ歩いて帰るだけという行為に我慢がならないというような発言をしていた（表5）。

子どもたちは、下校路でさまざまな道草遊びを展開しながら帰っている。そうした子どもの生態にマッチしていない環境デザインは、子どもにとって意味のない形態となるばかりか、余計な危険などを引き起こす可能性があるように思われる。



写真2 歩道からはみ出して遊ぶ子どもたち

#### 4 まとめ

同じ子どもたちによる、異なる環境下にある通学路体験への観察とインタビューから、次のようなことが理解された。

子どもたちの道草遊びという活動がどのように展開されるかといったことは、曲がり道や坂道などといった道の物理的な構成のされ方や、道に付随する自然環境などの要素の大小などの

ことからの影響が無視できないものとして数えられていくが、同時に、車が来ないなどといった、子どもたちが活動するうえでの心理的安心感が保障されるかどうかといった条件面が重要なものとなっていることは明らかである。

つまり、子どもが通学路を歩く際に、さまざまな環境体験を獲得するための物理的な条件が道に備わっていることは、体験を可能にするという機会の提供を行っているだけであって、子どもたちによってその機会が活かされるかどうかは、社会的な条件整備を必要としているのである。そのことが、子どもたちの環境体験につながるきっかけを保障していくことになるのだと考えられる。

子どもたちは、さまざまな環境体験を得られた道を高く評価していた。彼らは、基本的にはどんな道においても、環境体験を獲得することを試みていたように見えたが、環境体験そのものが獲得されにくい物理的環境のなかでは、やはりその実現は難しい。そのため、そうした道はプアな環境として彼らに評価されがちである。

子どもたちのさまざまな環境体験を可能とする、道の物理的な構成のされ方と社会的な条件整備がうまく組み合わせさせたバランスのとれた道環境デザインの構築が求められていると考えられる。

本研究の結果からは、他にも、子どもたちにとって真に役立つような環境デザインの構築について次のような重要な示唆が与えられた。それは、道環境デザインへのプロセス的視点として、子どもの生態に則したデザインルールの策定が重要であるということである。たとえば、子どもの安全確保のために歩道を設置した時のことを思い出してみたい。通学路に歩道を設置した本事例では、その設置理由が、子どもの安全確保にとって良いはずであるからという理由でもって構築されたのではあった。しかし、当

の子どもにとっては、道の環境デザイン構築において今回挿入された安全確保の論理が理解されなかったばかりでなく、実際に構築された物的環境についても否定的な評価が下され、大人が意図した安全確保とは裏腹に実際には危険を誘う環境となってしまうのであった。

つまり、たとえ環境構築の過程での論理が大人の基準からすると正しいと映るようなものであっても、当の子どもにとってそれが好ましいとの評価がなされなければ、安全確保どころか新たな危険を生み出してしまうという結果を生じさせてしまうということを、この調査結果は示しているのである。

子どものためにどのような通学路環境を整備していったらよいのかといったことを検討する場合には、計画された整備が実行された場合に、果たして子どもたちはどのようにその改変された環境と向き合うのかといった姿を明確に想像することが必要であろう。そのためには、本研究が実施したような、子どもの生態をつぶさに観察し自らが子どもと同じような体験を行うことで、子どもの視点に立った環境評価を行っていくことが、子どもが実際に利用し歓迎する環境を構築していくための有力なアプローチの1つになるものと考えられる。

## 引用文献

Gill Valentine. (2004) *Public Space and the Culture of Childhood*. Ashgate.

住田正樹・南博文／編 (2002) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在. 九州大学出版会.

仙田 満 (1992) 子どもとあそび. 岩波書店.

Hart, R. (1979) *Children's Experience of Place*. New York: Irvington Publishers, distributed by Halsted Press.

Hart, R. (1997) *Children's Participation: The Theory and Practice of Involving Young Citizens in Community Development and Environmental Care.*, London: Earthscan.

藤本浩之輔 (1974) 子どもの遊び空間. 日本放送出版協会.

水月昭道, 南博文 (2003) 下校路に見られる子どもの道草遊びと道環境との関係. 日本建築会論文報告集, 574, 61-68.

水月昭道, 南博文 (2003) 子どもの遊び環境研究の動向と展望. 都市・建築学研究 九州大学大学院人間環境学研究院紀要, 4

水月昭道 (2004) 子どもの「遊びの場」の構造に関する研究～通学路における道草遊びと道環境とのかかわりから～. 九州大学学位論文

水月昭道 (2006) 子どもの道くさ. 東信堂

無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (2004) ワードマップ 質的心理学—創造的に勝つようするコツ—. 新曜社

Werner, C. M., & Altman, I. (1998) A dialectical/transactional frameworks of social relations : Children in secondary territories. In D. Gerlitz, H. J. Harloff, & J. Valsiner (Eds.), *Children, Cities, and Psychological theories : Developing relationships*. Berlin : Walter de Gruyter.

Fine, G. A., & Sandstrom, K. L (1988) *Knowing Children — Participant Observation with Minors*, Sage publications.

(2006. 11. 21 受稿) (2006. 12. 21 受理)